嘗てこの觀念主義が何等造形美術と抵觸する點がなかつたかどうかといふ事や、或は更に、大乘佛教は小乘佛教よりも、自ら偶像崇拜に應じたものかどうかといふ事を、全體的に論ずる爲に費す積りもない。寧ろ、純哲學的な議論には互らないで、純美術の圈内にある具體的實在を出來るだけ纒めようと努めるにあるので、印度古代派を見る上に、已に百餘年前、進化論の祖ラマルクが立てた如き自然科學の方法を、之に適用しようとするのであるといつた方が可からう。

斯かる特殊な立場に於て、世尊滅後の僧伽や歸依者の事情を考へて、之に立還つて見、又、世尊の尊崇や、その遺物崇拜から生れたと思はれる一種の美術的表現を、今日に遺つてゐる跡を辿つて組直して見る樣にする積りである。斯くて、出來得る限り起源に近き、佛教美術の胚種を得れば、其の萠芽が發育し、組織が調うて、一層複雜になり行く事も知られる。約言すれば固有の法則に從ふ其發達がわかる。他の言葉でいへば、其發生、其環境、其始期の發達に於て得た速度が、動物界の種の形態の變遷に示されてゐる樣に、